

専攻科卒業生が在學生に体験談を語ることから得られるもの

—卒業生へのインタビュー調査より—

須江裕子 若林美佐子（美作大学短期大学部）

キーワード：介護福祉士・指導者・卒業生・在學生・卒後教育

【目的】

国家資格として介護福祉士資格が創設され 30 年の節目を迎えた。厚生労働省の報告書によると、介護人材確保対策においては多様な人材の参入促進と共に、介護福祉士は中核的人材として改めて明文化され、介護職チームのリーダーとして位置づけられた。本学専攻科卒業生の中には、現場経験を積み、リーダー的な役割を担う者も多く、また後輩にあたる在學生に対する助言・指導の機会も増加している。

本研究では、卒業生が在學生へ体験談を語ることが、卒業生自身にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的とする。

【方法】

〈対象〉平成 29 年度在學生に対して体験談を語る機会を持った専攻科卒業生 6 名（表 1）

表 1 対象者の基本属性

対象者	性別	年齢	介護職 従事年数	所属
A	女	43	15 年	介護老人福祉施設
B	女	44	12 年	介護老人福祉施設
C	女	40	9 年	社会福祉協議会
D	女	31	9 年	介護老人福祉施設
E	女	28	6 年	重度心身障がい児（者）通園事業
F	女	24	2 年	介護老人保健施設

〈方法〉

研究の主旨を説明し、同意を得た上で 2018 年 5 月、1 名 20～35 分のインタビューを実施した。調査方法は半構造化面接法を用いた。主な質問項目は、体験談を語ることに「依頼を受けた時の気持ち」「実施後の感想」「自分自身が成長したこと」「一番に伝えたかったこと」「今の仕事に活かされたこと」「今後学びたいこと」等である。本研究では、大谷（2008, 2011）が考案した SCAT（Steps for Coding and Theorization：以下、SCAT）を用いて分析を行った。分析にあたっては、まずインタビューデータの逐語録を作成後、研究者 2 名で SCAT の手順に沿って抽出された構成概念をもとにストーリーラインを作成した。倫理的配慮：本調査は美作大学・美作大学短期大学部研究倫理審査委員会にて承認を得た（2018 年 4 月 26 日 No.30-01）。

【結果および考察】

6 名のストーリーラインの概要は表 2 の通りである。

表 2 ストーリーライン

A	在學生に対しては、養成校は学費を払う価値があり、介護の道を勧めることへの自信はある。 <u>資格の強みや将来に渡る有益性の理解促進、更には人間関係が広がることを伝達していくことが自己の役割</u> であり、それが、 <u>将来の自分のための投資</u> でもある。介護の良し悪しは個人の価値観によるものであり、 <u>魅力伝達の使命感</u> を持ち、語る際には取捨選択し、 <u>プラス面のクローズアップを試みた</u> 。 <u>後進の育成に携わることにより、自己肯定感が高まり、プラス作用が生じた</u> 。
B	学生の応援団として、 <u>学生と社会人の視点の相違を生かして、心構えや資格の意義を伝達する</u> 。 <u>原点回帰</u> する中で、 <u>理想と現実を見つめ、自らの課題や可能性に気付いた</u> 。 <u>キャリアアップの必要性を意識し、承認欲求の保持と、自発的学習を継続する</u> 。
C	<u>介護の根拠や介護の手法の学びが卒業生としてのプライド</u> となり、そのことが、 <u>経験を重ねることによって仕事に対する自信</u> につながっている。在學生に対する語りという役割遂行が慢性化からの <u>脱却の機会</u> となった。さらに現状に甘んじず、 <u>高みを目指す</u> 。
D	<u>自らの役割遂行を通して、原点回帰し、経験や思いを言語化</u> することで、 <u>意図の伝達実現に繋がった</u> 。また、 <u>語りの経験の活用が、自己の可能性の広がりや介護業界への人間関係の発展の契機</u> となり、 <u>今後の活躍への期待感が芽生えた</u> 。これらのことから、 <u>語りの機会が自己のキャリアアップへの良循環を引き起こすプラス効果</u> となっている。
E	今回の挑戦が、 <u>自らの自信発掘や新発見</u> となり、 <u>役割遂行に対する達成感と共に、専門教育の勧め</u> について語る <u>使命感</u> を持った。さらに、 <u>新たな学びへの意欲が湧いている</u> 。
F	学生との関わりから <u>社会人としての自覚</u> が芽生え、また、 <u>自己統制の重要性を認識し、成長への意欲が湧いた</u> 。しかし、 <u>職場内の人間関係の困難性や理想と現実のモヤモヤ感</u> は存在し、 <u>過去の失敗からの学びを踏まえて視野の拡大に努めている</u> 。

卒業生は在學生への語りによって自己の振り返りや、意欲向上に繋がる事が分かったが、理想と現実のギャップを抱えており、語りの内容について迷いがあることが分かった。こうしたことから、継続的な卒後教育の検討が求められる。

また、本研究は対象を本学卒業生 6 名に限った研究であり、今後は他の卒業生や、在學生側への調査及び検討の必要性がある。